

## 〈講演〉「論語」から学ぶ言葉の力 参加者：33名

2018年6月3日(日) 川崎市・麻生市民センター 講師：植田渥雄先生

「麻生サークル祭」が、今年も麻生市民センターで開かれました。昨年と同様に午前10時半、「『論語』から学ぶ言葉の力・その2」と題して植田先生の講演はスタートしました。今回は昨年を上回る受講者で会場はほぼ満席となりました。本講座では、まずプロローグとして「『論語』とはどんな書物か」「孔子とはどんな人物か」「春秋時代とはどんな時代か」について、昨年とは違う切り口で噛み砕いた説明がありました。

春秋時代とは、BC.770～BC.476年。今から約2500年位前という、気の遠くなるような昔です。天下を統率していた周王朝の権威が衰え、大小様々な国が乱立し、秩序が大いに乱れた時代を孔子(BC551年～BC479年)は生きたわけです。

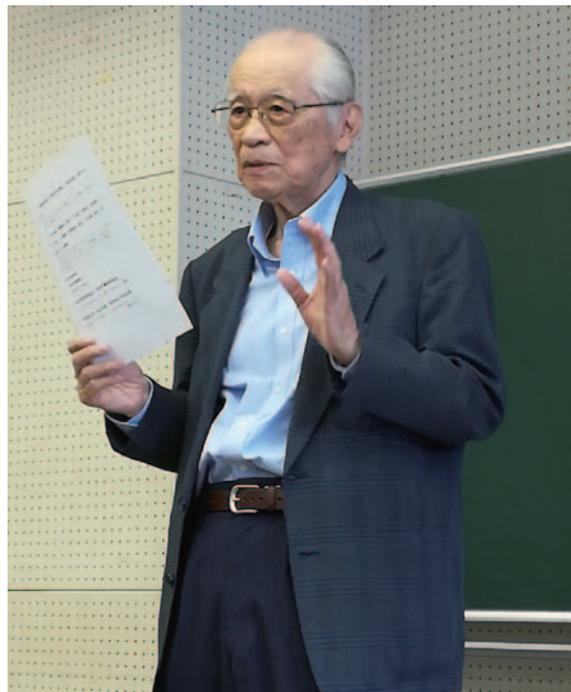
言葉も価値観も乱れた事態に直面して、孔子はその現実はどう立ち向かったのでしょうか。ここで先生は、最近発生した某大学のアメフト部の記者会見で、監督が「乖離」という表現を使ったことに触れられ、「これは発言者とそれを受け止めた人との考えの不一致、誤解を言うのでしょうか、孔子の生きた時代もそのような時代と言えるのではないかと思います」と言われ、皆さん2500年前の雰囲気垣間見た気分……。

孔子は、『春秋』(歴史書)を編むことにより言葉の乱れを正したと言われていますが、乱れを正すには、言葉は一字一句正しくかつ簡潔に、という姿勢を貫きました。では孔子はどのようにして弟子

たちを正しく導こうとしたのでしょうか。

当時は、当然まだ紙の書物はない時代です。竹や木に文字を書いて、それを麻糸で繋ぎ合わせ、丸く巻いたものが書物でした。従ってこのような書物は重い上に持ち運びにも不便です。今の文庫本一冊と同じ内容を木片に書けば、とても一人では背負いきれません。したがって確かな知識を身に付けるには、丸暗記しかありません。そこで孔子は弟子に教える際、いくつかの覚えやすくする工夫をしていたのです。一つは対句的な表現で「対比話法」を用いました。その例をいくつか見てみましょう。

★『学而不思則罔、思而不学則殆』—(学びて思わざれば則ち<sup>くら</sup>く、思うて学ばざれば則ち<sup>あや</sup>殆うし)。「先生の真似をするだけで、自分で考えることをしなければ確かな



講義をする植田先生

知識は身に付かない。] 自分勝手に考えるばかりで相手の考えを学んで受け入れなければそれは危険である。つまり、人から学ぶことと自分で考えること、そのどちらが欠けてもだめだ、ということです。先生は「この句は全部で12文字ありますが、6字が前後で対になっていて、更に分けると2文字ずつになります。中国語で読むとリズムがよく、音楽的にも、意味的にも、覚えやすいように工夫されています。」といわれ、実際に中国語で発音されましたが、これなら確かに覚えやすいと皆さん納得。

さらに「学」に関連して「学習」という文字の意味の説明がありました。「学」とは「真似ること」、「習」は「この字の原意は、ヒナが巣立つため何度も



満席の視聴覚室

羽ばたく練習をする。つまり自ら飛ぶすべを身に付けるまで稽古をすること」だそうです。「学」と「習」について、『論語』の初頭に書かれている次の有名な一句を見てみますと、

★『学而時習之、不亦説乎？』—(学んで時に<sup>これ</sup>之を習う。また説<sup>よろこ</sup>ばしからずや)。まず先生の真似をして、それを繰り返しながら知識を確かなものとして身に付けていくことは嬉しいことだ、となります。「説」は、「悦」と同じ意味。「時」は、「その都度」の意味。あらゆる技術や芸能、スポーツも同じこと。頭で考えるだけでなく、繰り返し練習して着実に身に付けていくこと。喜びはその中にあります。

★『君子和而不同、小人同而不和』—(君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず)良きリーダーは、融和を求めるが同一を求めない。凡庸の人は同一を求めるが、融和を求めない。つまり、互いに立場や性格の違いを認め合った上で和合できるかどうか、という話です。この例は友人関係のみならず、政党間や国家間、民族間、異文化間にも当てはまりますね、そして夫婦間にも、と植田先生。対句的な表現は確かに記憶に残りますね。句の前半だけでも意は伝わりますが、対照的なフレーズを並べることで、内容をより正確にかつ鮮明に相手に印象付けることができます、とも。

弟子が覚えやすくするための二つ目の工夫は、「豊かな感情表現」の句にしていること、だそうです。その例として3句挙げられましたが、その中で昨年の講演でもお話のあった次の句を見てみますと、

★『巧言令色鮮矣仁』—(巧言令色鮮いかな仁)。言葉をうまく飾り、顔色をうまく取り繕う人には、仁徳のある人が少ないなあ)。この句の中で「矣」という文字は、文末に用いる文字で、断定や慨嘆に使いますが、倒置法で「仁」の前に置くと、思いの込もった豊かな感情表現となり、「～なんだよなあ」といったニュアンスになるそうです。

他にもたくさん句が紹介されましたが、紙幅の関係で割愛させていただきます。ここに紹介した句だけでも孔子の人となりや、言葉をいかに正確に弟子に伝えようと腐心したのかが分かるような気がしますね。

講座で植田先生は、『論語』はこれまで何百回も読みましたが、読む度に、新しい発見があります。また2500年前の人の考えが今の世にも生きていることは驚くべきことですね。先を見通す眼力は素晴らしいとしか言いようがないです」と話されました。講演の時間は12時までの1時間半でしたが、植田先生のユーモア溢れるお話に時の経つのを忘れ、次のグループが準備に入るため、質問時間が取れなかったのが残念でした。

◆あさおサークル祭り報告

**ボイス・トレーニング** 参加者：14名  
2018年6月3日(日) 川崎市・麻生市民センター  
講師：Emmeさん

今年もEmme先生のボイストレーニング公開講座で、サークル祭りに参加しました。

部屋が例年と違い、奥まった第一会議室ということも影響したのか、参加者は14名と少な目でした。

まず、頭から足先まで十分ストレッチをし、滑舌の練習の後、胃両脇辺りの筋肉の動きを意識しながら超低音から超高音まで発生をしていくと、声がどんどん出るようになって、皆、笑顔でした。その後「手のひらを太陽に」を元気良く歌いました。Emmeさんの快活でわかりやすいご指導のもと、皆楽しい時間を過ごしました。